

地域施設の複層的利用にみる社会生活圏形成に関する研究

～大阪市西成区釜ヶ崎を事例として～

(株)オオバ 大宮 風 香

1. はじめに

本研究対象地域である釜ヶ崎は、『無縁社会』を代表する地域としてメディアで紹介されているなど、社会問題が集積するまちの一つである。また、この地域には食事・入浴等といった日常生活動作が自宅で完結出来ず、それを補完するため、外に出ざるを得ない、人と交流せざるを得ないという特徴がある。

地域における「ひとのつながり方」を見たとき、『刹那縁』ともいえる新たなつながりによって潰れないレジリエントな姿を垣間見ることが多く、その要素として、複層的な「まちの使い方」があると考えている。

そこで本研究では、釜ヶ崎における人々の「まちの使い方」に注目し、地域の施設及び共用空間の利用実態について、実際にまちを活用する人々の体験から調査し、社会生活圏という視点から地域拠点の重要性とつながり形成の手段を明示することを目的とする。

2. 地域概要と利用実態調査

大阪市西成区釜ヶ崎は長年「単身日雇い労働者のまち」と言われてきたが、近年は、生活保護などに対する支援の充実した「福祉のまち」といった側面も持つ。

釜ヶ崎は貧困などの様々な課題を抱えた人々の集まる場所であり、多くのNPOや支援団体などによる集まる場所であり、多くのNPOや支援団体などによる集まる場所であり、多くのNPOや支援団体などによる集まる場所である。地域内にはクラブ活動の場など居場所形成を目的としたものから、公園や公共施設など偶発的に発生するものまで、様々な形態の居場所・溜まり場となっている場が数多く存在する。これらの多くは他地域では見られない、釜ヶ崎ならではのものであると考える。

3. 調査概要

本研究では、日常生活における訪問拠点を経時的に生活領域として整理するために、地域滞在者⁽¹⁾45人に対し対面式のアンケート調査を、施設利用者、地域居住者33人に対しヒアリング調査を行った。調査内容は「まちの使い方」、「1日のスケジュール」、「普段利用する施設」とした。

4. 社会生活圏・行動分類

調査対象者の行動を訪れる拠点の数、拠点の種類、行動(行為)の種類、行動範囲によって分類したものを社会生活圏⁽²⁾として設定し分析を試みた(図-1)。

「拠点の種類」については、日常生活動作のために使う拠点(コインランドリー、スーパーなど)を日常拠点とし、日常生活動作のための拠点が結果として交流を生む場所になっている場合を間接拠点とする。交流型は、交流を目的とした拠点とし、たとえばひとと花センターがこれに該当する。したがって、日常拠点よりも交流拠点の方が他者との交流密度が濃くなると考える。「行動種類」については、拠点までの道程を表す。散策型は拠点にたどり着くまでに寄り道をしていく型のため、直行型よりも他者と関わりが発生する可能性が高いといえる。

上記の内容について、対象者78人を図-1右の分類に基づき、分類した。以下に、特徴的な事例を提示する。

拠点	数		分類
	少	多	
種類	日常	間接	a-地域内
	生活に必要な拠点 睡眠、入浴、食事等	本来の目的外で交流機会が生まれているもの	b-地域外
行動種類	直行	散策	1.多数拠点散策型
	直行	散策	2.多数拠点直交型
	直行	散策	3.少数拠点散策型
	直行	散策	4.少数拠点直交型
	直行	散策	5.散歩型
行動範囲	自宅	地域外	6.自宅拠点型
	自棟内	地域外	

図-1. 行動分類 分類軸

【事例1 (a-2) 地域内多様拠点直行型 Aさん】

Aさんは夜間緊急シェルター⁽³⁾や簡宿⁽⁴⁾を拠点として地域で生活している。朝4時半ごろ起床し、5時にシェルターを出る。早朝はセンター⁽⁵⁾の2階や新今宮文庫に移動し、眠ることが多い。また、三徳寮の談話室を知人と集まり情報共有を行う場として利用している。昼からはふるさとの家に移動し、食事を済ませるとその場にいた人と将棋を楽しむ。食事は特掃⁽⁶⁾や空き缶拾いで得たお金と、炊き出しの利用で賄っている。その後17時にセンターに戻りシェルターへ移動する。Aさんはあらゆる施設を活用し、まち全体を家のように利用し、日々を過ごしている。

【事例2 (b-3) 地域外少数拠点散策型 Bさん】

Bさんは生活保護を受け、SHに居住している。毎日、1時間程度の散歩には行くが、それ以外ほとんど家から出ない。毎週月・木曜日は地域外にロト6の購入に出かけ、そのついでに食糧を買い貯め、レンタルショップで数十枚のDVDの調達を行う。

人混みが苦手で人と関わるのが嫌いなBさんは、1日の大半の時間を自宅でTVやDVDを見て過ごしている。

現在居住するSHでは、朝の安否確認や大浴場での入浴、外出時の受付の声かけなどがあるため、わずかではあるが他人と関わりが生まれ、結果的に孤独は避けられている。また、Bさんはそれらの交流を見守り機能と認識している。

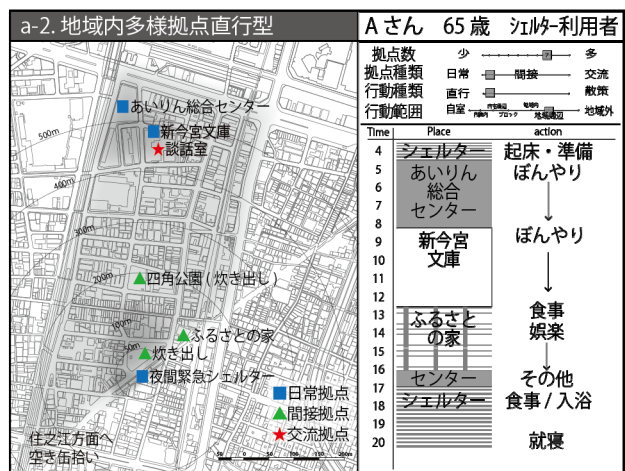


図-2. 【事例1 (a-2) 地域内多様拠点直行型 Aさん】

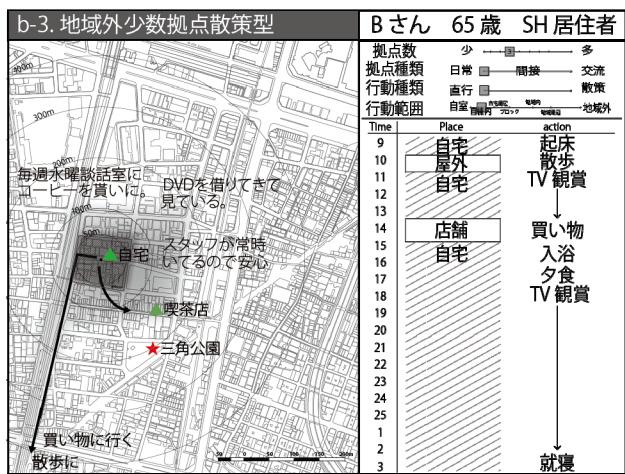


図-3. 【事例2 (b-3) 地域外少数拠点散策型 Bさん】

5. まちの利用実態—地域施設に関するニーズ

ヒアリングによって主な施設等に関するニーズを整理した。(表-1)

a. あいりん総合センターは「気軽に立ち寄る場」、「友人や労働者が話す場」、「将棋などの娯楽の場」として、いわゆる『その場限りのつながり』を形成する拠点となっている。また、アンケートでは3Fで「布団や段ボールを敷いて眠る」、「施設内の洗面所で洗顔する」等という行為も見られ、居住空間の一部として用いられていることがわかる。

b. ひと花センターは、「アルコール漬けだったが、プログラムに参加してから自然とアルコール摂取量が減り、楽しい毎日になった」、「耳が悪く会話が難しいが、メンバーがそれを理解して受け入れてくれるので楽しい」など、他者交流を促す効果的な場所として成立する拠点となっている。

c. 三徳寮は、「金銭管理や作業を行なうことでギャンブルによる生活破たんを防止している」という安定した生活を送るために欠かせない機能を持つ。また、クラブ活動等を通し他者とのつながり形成を促進されている。入浴や食事といった日常生活動作も、集団で行うため、それをきっかけに交流する間接拠点の役割を果たしている。

また、e. のように支援者の必要性を唱える者も多い。その他にも d. カラオケ居酒屋・f. 公園・ベンダー・コインランドリーなど多様な拠点で交流機会が創出されている。



a. あいりん総合センター
求人等、職安機能のほか、娯楽室や食堂等もあり、団欒の場として利用されている。散歩ついでに利用する人が多く、刹那的な交流が見られる。



b. ひと花センター
会員制の、居場所づくり支援施設。さまざまな体験プログラムが毎日開催されている。特定の人と継続的につながる、交流拠点となっている。



c. 三徳寮
生活保護のための救護施設。集団生活を行なう。クラブ活動やボランティアが開催されており、そこで友人を作る人も見られる。

図-4. 施設例

表-1. 施設に関する意見

		記号:○…肯定意見、積極的意見 ×…否定意見、消極的意見	
a. あいりん総合センター	○	「行く行く行く。センターも、ずーとぶらーつとするねん。」	c. 三徳寮
	×	「あの、将棋が好きだからな。センターの2階でね、」(娯楽室がなくなると)困る。…困るなあ。」	
	○	「あんなん、つぶしていいんちゃう。一日曜日なんか基本的には募集してないんやで、せやけど、ぶらぶらしてるだけやん。」	
b. ひと花センター	○	「もう今は…行きたくないし、行けへん。」	f. 公園
	×	「喋る。あのね、—運転手と喋ったり。」	
	○	「センターの中に友達があるから、雑談したりね。—待ち合わせなんかせえへん。ただ自然に、センターはいったらおるんや。」	
c. 三徳寮	○	「その前にはもう戻れないでしょう、おれは。楽しいんだもん。いま。教えてもらうのが。」	e. 支援員
	×	「楽しい言うたら…楽しいかな。だからずつと来てるんや。」	
	○	「…まあ一応ここがそういう(つながりづくり)目的で入ったんだけどな。ちょっとさみしいから、なあ、多少知り合いになった方がいいと思って。でもなかなかできん。」	
d. カラオケ居酒屋	○	「聞いたけど、これ全部区役所が運営してるでしよ、だから区役所の目が光つとる、監視をされてるようで嫌だつて。」	f. 公園
	×	「…まあ一応ここがそういう(つながりづくり)目的で入ったんだけどな。ちょっとさみしいから、なあ、多少知り合いになった方がいいと思って。でもなかなかできん。」	
	○	「飲みについて友達がいるから行くしね。—できたりして。」	
e. 支援員	○	「初めて俺って人として見てもらってる。」	f. 公園
	×	「信用できるなあっていうか。職員が。」	
	○	「知ってる人がおるだろ。たまに、声かけて、『元気ですか』って言って。応答がなかったらもう、ずーつといて。」	
f. 公園	○	「座って。もう、普通に、おにぎりを食べたり。」	f. 公園
	×	「(焚き火)してる。—『寒いなあ』とかね、話してね。」	
	○	「わしはもう、割り切ってたから。ここはもう飯食うとこや。」	

6. 分析

今回の調査では「まちの使い方」について、社会生活圏・行動の分類を行なった。釜ヶ崎には様々な施設があり、多様な交流機会を創出している。あいりん総合センターの1階寄せ場は、早朝の求人以外はフリースペースとなっており、これといった役割を持たない。しかし、それゆえに人々は自由な発想でその場を利用することができ、何気なく気軽に立ち寄れる、刹那的な交流を行なえる場となっている。

継続したつながりを求める場合、ひと花センターや三徳寮などといったプログラムやクラブ活動をもつ施設による「ついで型」ともいえる拠点のあり方が有効である。

7. おわりに

釜ヶ崎は日常生活動作が自宅(自室)で完結しない場合が多いため、まちに行為が溢れだし、他地域よりも共用・共有空間の定義が広い傾向がある。人と関わりたくない、と考えていても結果的に人となつがる、少なくとも誰かの目には留まることになっている。地域施設及び共有空間の利用実態を社会生活圏域という視点からみたことで、様々な行為がまち中で複雑に折り重なるという状況がわかった。

明確に段階的にセグメントされた共有空間ではなく、緩やかに複層的なグラデーションが生者によって彩られている「まちの使い方」を見たとき、孤立を生まないまちづくりや空間計画デザインにおける一つの手がかりとなるのではないだろうか。

註釈

本稿は 2016 年 近畿大学 建築学部 卒業論文「地域施設の複層的利用にみる社会生活圏形成に関する研究～大阪市西成区釜ヶ崎を事例として～」大宮風香著を加筆修正したものである。

補注

- (1)特定の住所を持たず、地域内で寝泊まりする者を指す。
- (2)日常生活動作のうち、個人空間以外の場で行う行為の活動範囲。範囲が広ければそれだけ他者との無意識的な接点・交流確立が上がる。
- (3)日雇い労働者が無料で宿泊できる共同宿泊施設。
- (4)一泊 500 円～1000 円と格安で泊まれる宿。風呂便所共同で、居室は3畳1間程度のものが多い。
- (5)あいりん総合センターを指す。
- (6)高齢者特別清掃事業という。65 歳以上日雇労働者の雇用を対象とした清掃業務である。輪番制で、月に5回、1日5千円程度の収入になる。

参考文献

- 1)窪野琢也：地域住民や新規流入者の居場所づくりによる地域ストックの最価値化に関する研究 ,2013
- 2)藤田悠樹：社会的条件不利地域におけるパブリックスペースの多層的利用に関する研究 ,2015
- 3)原口 剛 他：釜ヶ崎のススメ, 洛北出版, 400p, 2011.10.03